

外国人監督と選手をつなぐ通訳は、発言を直訳すればいいというものではない。時と場合によって訳し方、伝え方に気を使う必要がある。

ある通訳が監督のゲキを「おまえら、それでも男か（実際の言葉はもっときつかった）」とそのまま訳し、「あんた（通訳）に言われたくない」と選手のひんしゅくを買



## フットボールの熱源

ったという。

直訳しても通じない独特の表現もあるから難しい。ジーコ前日本代表監督を支え、このほど『神の苦惱 ジーコ』という15年』を出版した鈴木国弘通訳からこんな話を聞いたことがある。

ある時、ジーコ監督がブラジルでしか通じない冗談を言った。直訳したのが笑いは起こらなかった。監督は激怒したという。「通じないと思ったら、何でもいいから言い換える。とにかく、あそこは笑いを取る場面だっ

### 直訳が通じない

「たんだ」。短時間で頭をひねり、ニュアンスは違っても構わないから、監督に代わって笑いを取れというのだから難業だが、つまり、それだけ鈴木さんを信頼していたというところもある。

昨年のスコットランド戦で無得点に終わった直後、深刻な顔をする記者団の前で、鈴木さんは監督の言葉を「大丈夫。便秘と同じで、ゴールも何かのきっかけでドッと出ますから」と伝え、場を和ませた。新聞各紙がこの言葉を掲載したが、「ト

品」とみて執筆を自粛した記者もいた。すると社内ですら「こんな面白いコメントをなぜ使わない」と指摘されたという。しばらくして鈴木さんとの雑談中はこの発言に話が及んだ。すると名通訳はあっさり言うのだ。「あっ、あれね、ジーコは言っていないですよ」。直訳では笑いが取れないと悟つての機転。まったくもう、うそつき。しかも、監督の狙い通り、雰囲気は和らいだのだから見事としかいいようがない。

(吉田誠)